

厚生労働科学研究費補助金（障害者総合政策研究事業）  
分担研究報告書

医療現場における対面および遠隔での手話通訳を介した  
コミュニケーション時に生ずる意思疎通不全要因の研究  
（その倫理的側面についての知見）

研究分担者 奥田太郎 南山大学教授

研究要旨

本研究は、総括研究の遂行過程で副次的に得られた知見をもとに、医療現場において、ろう者をはじめとする聴こえない（聴くのが難しい）患者と聴こえる医師との間で意思疎通が成立する前提として、診療場面に入る以前に解決しておくべき倫理的課題を哲学的アプローチで抽出する。調査の実践、関係者へのインタビューの内容に接することを通じて、（1）意思疎通支援ツール開発時に考慮されるべき利用者の主体性の問題、および、（2）問題を捉える視点の多様性と当事者性の問題が、考慮しなければならない課題として浮かび上がった。（1）については、意思疎通支援ツールの使用時に患者と医師のそれぞれの主体性が適切な程度発揮されるようにツールをデザインすること、（2）については、非当事者の積極的な関与を含む多様なアクターとの共創による意思疎通障害要因の解明が、同化に陥らずにユニバーサルで包摂的な機能をもった支援ツールの開発につながることを、結論として提示された。

A. 研究目的

本研究は、総括研究の遂行過程で副次的に得られた知見に基づき、医療現場における手話通訳を介した意思疎通にまつわる倫理的課題を発見し、整理することを目的とする。そうした課題の把握により、医療現場での手話通訳を介したコミュニケーション時の意思疎通不全要因の改善策の実行を促進する方策が見出されると見込まれる。

B. 研究方法

総括課題での調査研究、医療関係者や手

話関係者へのインタビュー等を通じて得られた洞察を複数の研究者で共有・議論した上で、各種文献等から得られた知見と重ね合わせることで、医療現場における意思疎通支援ツール開発の前提として踏まえておくべき倫理的課題を抽出する哲学的アプローチをとった。

（倫理面への配慮）

本研究は、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部研究倫理審査委員会、および南山大学研究審査委員会（承認番号：23-

010) の承認を受けている。

### C. 研究結果

ろう者と聴者の間で動画内状況の視覚認識がどう異なるのかに関する調査の実践、医療者をはじめ、関連諸領域の人たちへのインタビューの内容に接することを通じて、診療状況における意思疎通支援ツールの開発を進めるうえで踏まえておくことが確認された。今回、確認されたのは、次の2点である。

#### 1) 意思疎通支援ツール開発時に考慮されるべき利用者の主体性の問題

医療現場における意思疎通において利用される支援ツールには、ろう者が動画コンテンツを見て医療用語等を確認する機能をもたせることが想定されるが、その際に、利用者である患者としてのろう者が主体的にそのツールを使いこなせるようにツールが設計されている必要がある。

そのように設計されるツールとしては、リーフレットのような紙媒体にとどまらず、病院を訪れる患者自身が携帯しているスマートフォンで利用することができるWEBアプリが望ましい、ということが、関係者への意見聴取と議論のなかで明らかになった。

さらに、動画内状況理解に関するろう者と聴者の比較調査の結果、無音状態における聴者の視覚認識は、ろう者の視覚認識と同じではなく、むしろ劣っている場合がある、ということが判明した。また、ろう者の生活において共有されている概念の「文法」とその判定のための「規準」が聴者のものとは異なっていることも窺われた。

#### 2) 問題を捉える視点の多様性と当事者性の問題

ツール開発に際して、先行研究は、手話に関わる当事者たちから得られた知見を中心に啓発的な要素を強くもったものを設計する傾向にあるが、昨年度の実験や今年度の調査、聴き取りなどに基づく分析の結果、先行研究の知見には、医療現場でろう者のみならず聴者も同じように直面している問題と、ろう者固有の問題とが混在し、両者がろう者固有の問題として提示されていることが少なからずあることがわかった。

### D. 考察

#### 1) 意思疎通支援ツール開発時に考慮されるべき利用者の主体性の問題

上記の研究結果からは、ろう者が主体的に利用できる形でWEBアプリを設計することが必要であるとわかる。WEBアプリに含まれる動画コンテンツについても、ろう者が患者として利用する際にアクセスが容易な内容にしておくことが求められる。しかし他方で、医療者が患者自身に最低限もってほしいと考える医療リテラシー（たとえば、血圧の数値の相場感など）があり、患者の主体性を重視しすぎることが、かえって患者の利益を損なうことになる場合も十分ありうる。したがって、医療現場でのコミュニケーションはまずもって患者のために進められなければならないが、そのために患者の主体性のみが杓子定規に重視されることには問題がある。

#### 2) 問題を捉える視点の多様性と当事者性の問題

上記の研究結果から、問題を捉える視点

には、当事者性ととも、多様性が求められることがわかる。この多様性は、多様な見方があることの発見のためにではなく、ろう者が患者として医療現場で医療者と円滑にコミュニケーションできるようにする支援ツールの開発のために、様々な文脈のなかでアイデアを温めている者たちが知恵を持ち寄るといった意味での多様性である。そうした多様な視点からの支援ツール開発を可能にする場としては、学会の場は必ずしもふさわしいとは言えないため、様々な筋の人々が集まって話しやすい座談の場を設定する必要がある。

#### E. 結論

医療現場における意思疎通不全を解消するための意思疎通支援ツールを開発・普及するにあたり、(1) 意思疎通支援ツール開発時に考慮されるべき利用者の主体性の問題と(2) 問題を捉える視点の多様性と当事者性の問題を考慮することが重要である。上記考察から導かれる結論はそれぞれ以下の通りである。

(1) 意思疎通支援ツール開発時に考慮されるべき利用者の主体性の問題については、意思疎通支援ツールの使用時に患者と医師のそれぞれの主体性が適切な程度発揮されるようにツールを設計することが必要である。

(2) 問題を捉える視点の多様性と当事者性の問題については、非当事者の積極的な関与を含む多様なアクターとの共創による意思疎通阻害要因の解明が、同化に陥らずにユニバーサルで包摂的な機能をもった支援ツールの開発につながる。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

芝垣亮介・奥田太郎, 2024, 「動画内状況理解における音の役割に関する一考察-ろう者と聴者の比較を軸に-」, 南山大学『アカデミア』人文・自然科学編, 27号, pp162-172.

##### 2. 学会発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

##### 1. 特許取得

なし

##### 2. 実用新案登録

なし

##### 3. その他

なし